

「〈知〉のオントロジー」—現代思想の構図— : (2/9)

by 佐伯 守 (2000.12.25、萌書房):

## I. 原秩序の構図

(transformed by Takaya Endo)

- 1.1 〈生きること〉の構図を描いたベルグソンの文章
- 1.2 〈向かいあう存在〉をどのような視点で見つめ
- 1.3 〈身分け構造〉を生み出し維持すること

### 1.1 〈生きること〉の構図を描いたベルグソンの文章

〈生きること〉の構図を描いた、次のベルグソンの文章を読むことから始めることにします。

(1)

「すでに、行為を通じて自己を示すという個人的意識に付与された能力からして、それぞれ生活体に依じて異なる物質圏の形成を要求する。この意味で、私自身の身体や、またこれと類比的に他の生活体は、何よりも私が宇宙の連続の中に区別する根拠のある物体である。しかしいったんこの身体が構成され区別されると、それが経験する欲求は、さらに他の物体をそこから区別し構成することへ導く。最下等の生物においても、栄養をとるには探索、ついで接触、つまりは中心へ集中する一連の努力が必要である。この中心がまさしく、栄養になるべき 独立的対象となるであろう。物質の本性はいかにあろうと、生活はそこですすでに、欲求とその充足に役立つべきものとの二元性をあらかず最初の非連続をうち立てるだろう、ということができる。しかし栄養をとる欲求だけが、唯一のものではない。その周囲には他の欲求が組織されて、いずれもみな、個体あるいは種の保存を目的としている。ところでそれらの各々は、私たち自身のそばに、私たちがもとめるか避けるかせねばならぬそれから独立な諸物体を区別するにいたらせる。私たちの諸欲求は、だから、それだけ光の束があるようなもので、感覚的諸性質の連続に注がれて、そこに別々な物体を照らし出すわけだ。それらの欲求は、この連続の中にみずから一個の物体を切り出し、さらにそれがやがて人々にたいするように関係するにいたる他の諸物体を限定するという条件でのみ、充足することができるのである。感覚的現実からこうして切りとられる諸部分の間のこのまったく特殊な諸関係をうちたてることこそ、いわゆる生きることにほかならない。」(田島節夫訳『物質と記憶』第四章)

右の文章に見え隠れする〈生[せい]〉の絵模様を、少しみえやすくしてみましょう。

第一。中心と周辺、前景と背景、非連続と連続、図と地といった分節化・構造化がみてとれます。これは、いわゆる〈身分け構造／言分け構造〉のうち、前者にかかわるものです。生命という〈身〉を維持するために、有益／有害といった線分が、動物の生きる場を構成します。ここでは〈言分け構造〉にも触れた、丸山圭三郎の文章をかかげておきます。

(2)

「我々は言葉によって〈過去〉と〈未来〉、〈背後のあそこ〉〈前方のあそこ〉を差異化・差延化する、つまり「今、ここ」という時・空を超えた延長を作り出し、〈非在の現前〉

を可能にする。換言すれば、ヒトは言葉によって「今、ここ」という時・空の束縛からのがれ、「約束する動物」、「嘘をつく動物」となった。ヒトはポジティブな世界をゲシュタルト化〔形態化〕する身分けに加えて、ネガティブな差異に基づく非在の世界を言分ける。』（『カオスマスの運動』Ⅳ）

〈身分ける〉ということは、身にふさわしい外部を、身をもって保有するということです。生物の〈行動〉形態は、その〈生存〉形態であり、その形態に応じて、外部＝環境の〈形態〉も、また刺激の〈形態〉も、創出されます。形態としての刺激をつくりだすのは、むしろ生物（有機体）のほうです。外部はさまざまに、形態化されて存在するのであり、そして逆に、その形態化された外部が、行動の形態化をうながすのです（形態相互の〈環〔クライス〕〉的關係）。行動は二重の〈形態〉知であるといえます（メルロ＝ポンティは、行動を〈受肉せる弁証法〉とよんでいる）。

その意味において、〈知〉は〈存在〉であると、次のようにJ-P・デュピュイは言います。

(3)

「生物体は、常にそれ自身であり続けながらも、その環境から発する物質、エネルギー、諸形態の量によって貫通されている。知ることと存在することは、生物体にとって、同一の、唯一の働き〔オペレーション〕なのだ。〔中略〕環境は、認識する生きた存在に、そのままの形で取り込んだり再生産したりすることに甘んずるような既成の組織された形態を、押しつけはしない。知ること *con-naître* は認識すること *reconnaître* ではない。そうではなくて、協力して生まれること *naitre de concert* つまり、創造することなのである。環境の中には、自己-組織化体系にとって、初めから混沌〔カオス〕しかない。その混沌は、それ自体としての〔即自的〕混沌ではなくて、ただ単に、その体系にとっての混沌である。驚くべきことは、その体系が混沌〔カオス〕に、それにふさわしい形を刷りこみ、そうすることで、すくなくとも部分的に、それに意味を与えるということである。』（古田幸男訳『秩序と無秩序』第七章）

身分けと言分けの中間状態とも言うべき事態を、E・カッシーラーはこう言います。

(4)

「言語が直観的世界への関係を最初に確保するのは、言語がこの直観的世界の内容で満たされ、この内容をいわばおのれ自身のうちに流れこませることによってである。言語はあるときは、擬声語を形成して特定の客観的出来事を再現し、あるときは、おのれの出会う特定の相貌的性格を記憶にとどめ、音声形成のある種の基本的区別——緊張性子音〔硬音〕から弛緩性子音〔軟音〕か、明るい音調の母音〔前舌母音〕か暗い音調の母音〔後舌母音〕か——によってそれに目印をつける。そして、言語が感性的な印象価や感情価への直接の接近をあきらめ、音声の世界をおのれ独自の世界として扱うときにさえ、少なくとも音の関係のうちに外的対象の関係をなんらかの仕方では表現しようとする努力を、言語はさまざまに払っているのである。』（木田元訳『シンボル形式の哲学』(四)、第三部第五章)

これは、知覚世界をおおう〈表情〉世界が、〈音〉を通じて言語の世界とむすびつこうとするさまを表現したものです。

音声の世界の〈分節化〉が、〈世界〉の意味的分節化と接近する方向に、言語の進展がみられます。言語は、場所と物とから離れて独自の〈意味〉空間を形成する方向へむかうわけですが、しかし、その進展には、知覚空間のなかでの〈表情〉の受容も作用しているはずで、M・ブーバもまた、次のように言っています。

(5)

「さまざまな名辞や概念、また、人間や擬人物や事物にかんするさまざまな表象は、

関係事象や関係状態にかんする諸表象から分離して生じたものと推定してさしつかえない。《自然人》をおそう根元的で、霊を揺すぶりおこすような印象や感動は、関係事象そのもの、つまり向かいあう存在をありありと体感すること、そして関係状態そのもの、つまり向かいあう存在とともに生きることからひき起されるものである。(田口義弘訳『対話的原理 I』「我と汝」第一部)

## 1.2 〈向かいあう存在〉をどのような視点で見つめ

〈向かいあう存在〉、たとえば物Aと物Bとをどのような視点で見つめ、それらにどのような違い・差異をもった〈音声〉で対応し、それらをいかに言語化して把握するか、という問題、つまりAとBとの関係を言語的に樹立し位置づけるという問題が、〈言分け〉作業の重要な点となります。コトバの問題は、物と言(こと)、話す行為(パロール活動)と言語体系(ラング)といった諸点の関係にかかわります。ここではまず、コトバの問題の基本をみておきます。丸山圭三郎は次のように言います。

(1)

「世界の構造はア・プリオリ[先験的]に秩序を持ち、人間以前にカテゴリー化され分節されていて、各言語がそれぞれ既存の事物や概念に名づけをするのではない。各言語は、経験の所与の一つの再構造化に対応するものであり、それは常に独自のものであり得る。このことはまた、言語を、コトバの外にある意味や概念を表現する外的標識のように見做[な]す主知主義の否定である。」(『ソシュールの思想』第一章)

さらに続けます。

(2)

「コトバは本質的には非記号的なものであるため、自らの誕生と同時に意味をもつ。言語外現実働きかけてそれを切り取った瞬間瞬間にコトバの表現が完了し、それまでは存在しなかった意味が生れるのである。この行為の過程こそ本来のパロール活動であって、ラングはその結果に過ぎないにもかかわらず、実践的惰性態と化したラングの現実には巨大なシメール[長衣]となって個人の上にのしかかっている。[中略]ラングにおける関係が一つの布置であるとしたら、パロール活動は新たな布置への裁ち直しである。真の表現行為は自らに外在する概念や思考を表わすのではなく、モノ自体に関してその対象を分節し新たに名づけること、とりもなおさずその対象を存在せしめ、もしくは改変することにほかならない。」(同、第四章)

モノと直かに接した〈身分け〉の経験のなかで、モノが示したもの、それに沿って〈言分け〉という一種のモノの秩序化が生じる、と言ってよいでしょう。この点についてはM.フーコーがこう言っています。

(3)

「もっとも単純な秩序の設定にも、「諸要素の一体系」——すなわち、そのうえに類似と相違があらわれるような線分の規定、そうした線分が蒙りうる変異のいくつかのタイプ、最後に、そのうえには相違があり、そのしたには相似がある、といった境界——が不可欠なのだ。秩序とは、物のなかにその内部法則としてあたえられるものであり、物がいわばそれにしたがってたがいに見かわす秘密の綱目であるが、同時に、視線、注意、言語[ランガージュ]といったものの格子をとおしてのみ実在するものにほかならない。だからその秩序が、言表される瞬間を沈黙のうちに待ちうけながら、すでにそこにあつたものとして深層に姿をあらわしてくるのは、ただその基盤目の白い仕切りのなかからにすぎない。」(渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物』序)

環境ということば自体、すでに〈身分け〉の成果です。外部との適応関係という事態がそこにあります。〈模写〉と〈適応〉と〈情報〉とは独特の関係を保っています。K・ローレンツはこう言います。

(4)

「ある動物、もしくはその動物のある器官が外の環境世界のある事実に適応しているということは、つねに、ある意味でその環境世界を模写しているということである。馬の蹄は、その形態および機能において、草原の大地、およびその物理学的諸特性の一つの像である。ちょうど魚の鰭[ひれ]が水の、目が太陽の一つの像であるように。」(谷口茂訳『自然界と人間の運命』第二章)

知識、情報、認識こそ、〈刺激〉の内実です。これらの〈刺激〉は死活の問題となります。単なる物理的刺激という言い方は、〈身分け〉で生きる生物には縁遠いものでしょう。〈身分け構造〉とは、生物にとって〈知識＝情報〉構造を意味します。

### 1.3 〈身分け構造〉を生み出し維持すること

第二。こうした〈身分け構造〉を生み出し維持することが、そのまま〈生きること〉を意味するような生物が存在します。人間は、〈身分け構造〉に〈言分け構造〉をかさねて、いわば構造を〈世界〉化します。ベルグソンの言う〈感覚的現実〉は、単なる光学的-生理学的刺激の束ではなく、世界のあらわれと言うべきでしょう。知覚世界は、人間化されたモノとコトバで構成されています。

カッシーラーは次のように言います。

(1)

「実際には、われわれが知覚の世界と呼んでいるものでさえもすでに、けっして単純なもの、はじめから自明な所与などではない。ある種の理論的な基本作用を通りぬけ、その作用によって把握され、「理解」され、規定されるかぎりのみ、それは、「存在する」のである。[中略]空間のなかでの共在や並存、相互外在や相互共存といった関係は、「単純な」感覚、つまり空間内に位置づけられる感覚的「素材」とともに直接与えられているものではけっしてなく、それは、経験的思考のきわめて複雑な所産であり、そのあくまで間接的な所産なのである。空間内の事物が一定の大きさを持ち、一定の位置に、一定の距離にあるとわれわれが言うばあい、それは感官知覚の単純な与件を言表しているのではなく、この感覚与件を一つの関係的連関・体系的連関のうちに位置づけているのであるが、この連関とは結局のところ純粋な判断の連関にほかならないことは明らかである。(前掲『シンボル形式の哲学』(二)、第一部第一章)

〈生きること〉は、秩序だった現象(恒常、不変、規則性)と、無秩序な現象(変異、不規則)との両面にかかわり、それらを生存の糧[かて]として組織化すること、と言えます。そこには、同一性と差異性、同時性と継起性、また数と量、恒常と変化といったコトが、まだその定かなかたちを示さない、隠れた仕方で、知覚世界の構成要因として、生きています。

第三。さきにみた〈構造〉は、状況的なものです。状況内では〈特性〉が物象のあり方を代表します。人間と物象との〈あいだ〉が、共感や共演というかたちで形成される状況下での、そこから生じる〈現実〉は、物の相貌性や隠喩性としての〈……として性〉に即して成立しているでしょう。これとの関連において、昆虫は〈対象〉に現実をみることなく、〈特性〉にそれをみる、という事態も了解できます。

生物の世界にみられる〈現実性〉は大変特異的です。ダニとて〈意味の受信者〉であることを

示したのは、フォン・ユクスキュルでした(『生物から見た世界』参照)。ダニは、哺乳類の体から発散される諸要素(標識)のうち、酪酸のにおいの知覚と接触知覚と体温知覚の三つの知覚(像)に即して、落下する、走りまわる、食いこむ、といった作用を開始します。これら三つの知覚像と作用像とによってダニの世界の(現実)は形成されます。ある状況性の形態(状況ゲシュタルト)が、(現実)、つまり生物が生きるために意味のある特性的現実を生みだします。知覚世界は活動世界と一体化していますが、この点は人間に関しても同じです。

物や外部は、単に知覚や認識の対象、つまり(知る)ことの対象ではなく、行為の対象です。外部をもつことは、それとの関係において(自分)をもつことです。物を見ることには、その物に関していかなる行為が可能か、また不可能か、といったことの素描をとまなうのが通常です。総じて、意識は(……についての)意識ですが、この意識は単なる知的関与の意識ではなく、むしろ、なにか(について)なにかをないうるという、行動的に展望する可能的能力の意識というべきでしょう。知覚の地平は(行為)です。見ることも聞くことも、生きることを現実化する展望的行為です。メルロ=ポンティは、こう言います。

(2)

「私の見るすべてのものは、原則として私の射程内に、少なくとも眼なざしの射程内にあって、「私がないうる」(je peux)ことの地図の上に定位されるのだ。この二つの地図は、いずれも完全なものである。つまり、見える世界と私の運動的企投[プロジェ]の世界とは、それぞれ同一の存在(Etre)の全体を覆っているのだ。／誰も十分には考えたことのないこの異様な重なり合いが、視覚とは精神の面前に世界の画像や表象を、つまり内在的な観念の世界をしつらえる 思考の働きだと解することを禁ずるのである。……見る者はただその眼なざしによって物に近づき、世界に身を開くのである。[中略]また私の(運動)も、精神の決定、つまり主観という隠れ家の奥から命令を発して、延長的なものの中に奇蹟のように場所の移動を引き起こすといった絶対的行為ではないのだ。私の運動は視覚の自然な継続であり、その成熟である。物のばあいには、それが(動かされる)という言い方がされるが、私の身体は、それこそ(自分)を動かす(se mouvoir)のであり、私の運動も(自分)を繰り広げる(se deployer)のだ。」(滝浦静雄他訳『眼と精神』(一))

やや抽象的かも知れませんが、知覚世界と活動世界の一体性が、右に描かれています。同じことを、チャン・デク・タオはこう言います。

(3)

「私がこの木を見る時、私は、私のなかに実践的可能性——たとえば、近づいたり、遠ざかったり、まわりをまわったり、よじ登ったり、切ったり、果物を摘んだり等々する可能性——の地平を描き出す反応の総体が素描されるのを多かれ少なかれ漠然と感ずる。対象の体験された意味、対象の私にとっての存在は、対象的所与によって素描され、直接的には阻止され、あるいは抑圧されたこれらの行動において感じられ、体験されるこれらの可能性そのものによって定義されるが、現実的作用は、ここでは、たんなる眼球-運動的適応に還元されてしまう。意識は、対象についての意識としては、まさにこれらの阻止された素描の運動そのものにすぎない。この阻止において、主体——われわれは生きている有機体のことと解するが——は、それらの素描を自己のうちに維持するのであり、この維持そのものが自己意識を構成するものである。こうして、意識が行動の弁証法によって定義されるのは、まさにその体験された意味においてであって、たんに「外的」見地からだけではない。刺激によって呼びさまされ、実行の段階に到達することができる以前に、現実的作用によって引きとめられた反応は、廃棄され、保存され、のり越えられた契機として全体的行動のなかに統合される。この運動において、生きている有機体は主体になった。生命は、本原的には、周囲の物質の現実的吸収に存する。しかし、この過程の発展は、今後は、生物が、その環境にたいして、予め素描された反応の総体を広げるように導く。対象をこのように予め吸収することにおいて生物は、対象を自分のなかに

観念的に所有するものである。いいかえれば、生物は、対象の意識をもつのである。／あらゆる意識が、対象の意識であり、同じく自己の意識であること理由は、以上のようなことである。私は、必然的に、私にとっての対象の意味についての私自身における意識をもつ。というのは、この意味は、実際に体験されたものとして、私において阻止された行動の運動そのものであるからである。しかし、そのこと自体によって、主体は、主体をその真の存在において定義する自分の現実的作用の意識を直接的にはもたないということがわかる。(竹内良知『現象学と弁証法的唯物論』第二部第一節)

なにが私にできたか、また、できなかったかということ、意識において(観念的=間接的に)地平・背景としつつ、私はこの現実の行為をいま、直接的に行っている、ということです。過去・未来の時間軸に沿って展開される〈可能性〉と〈不可能性〉の地図のうえで、私の直接的な現実の行為が展開されているわけです。